

1719（康熙58）年の清のジュンガル遣使について ：使節派遣を通じたツェワンラブタン暗殺計画の顛末

タイトル（英）	The Qing Mission to the Zhungars in 1719 (Kangxi 58th Year) : the Attempt on Tsewang Rabtan's Life by the Qing Side
著者	澁谷, 浩一
雑誌名	茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集
号	2
ページ	105-121
発行年	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10109/13521

1719（康熙58）年の清のジュンガル遣使について

—使節派遣を通じたツェワンラブタン暗殺計画の顛末—

澁谷 浩一

要旨

1715（康熙54）年におけるジュンガルのハミ襲撃事件、続く1717（康熙56）年のチベット侵攻により清・ジュンガル関係が悪化する中、清の康熙帝は1719（康熙58）年にジュンガルからの使節の到来に応える形でインジャナ使節をツェワンラブタンに派遣した。講和を呼びかける文面の勅書を携えたこの使節団には、実は1人の道士が参加しており、この道士の操る「神法」によりツェワンラブタンの暗殺が企てられた。本稿では、この使節が派遣されるに至る過程を詳細に追ひ、当時の清・ジュンガル関係の一面を明らかにする。

はじめに

1715（康熙54）年におけるジュンガルのハミ襲撃事件を契機として一気に対立が先鋭化した清とジュンガルの関係は、その後のジュンガルによるチベット侵攻によって決定的に悪化した。1717（康熙56）年にチベットに侵攻したツェリンドンドブ率いるジュンガル軍を撃退するため、清側は軍を派遣したが、かえってジュンガル軍の反撃にあい、康熙帝は皇14子允禩を撫遠大將軍として改めてチベットに派遣、ダライラマ（7世）及び青海軍を伴った清軍は1720（康熙59）年によくチベットからジュンガル軍を駆逐することに成功する¹。

清とジュンガルの関係において特徴的なことは、軍事的な衝突が避けられない状況になってなお相互に使節の派遣を行っていたことである。ハミ襲撃事件後の1715（康熙54）年及び1716（同55）年に計3回、そしてジュンガルのチベット侵攻後の1719（康熙58）年にも清はジュンガルに講和を呼びかける使節を派遣している²。これによれば、康熙帝はジュンガルに対して軍事的圧力をかけながら、一方で使節派遣を通じて講和の可能性を探ることをなお完全にはあきらめていなかったように見える。しかしながら、本稿で述べるように、チベット侵攻後に派遣された1719（康熙58）年の使節には従来康熙帝が示して来た基本姿勢から逸脱した要素が認められる。『康熙朝滿文硃批奏摺』にはこの時の使節派遣に関する裏事情とも言うべき内容を含む程度まとまった史料が存在する。それらによれば、驚くべきことに、康熙帝はこの使節団に一人の道士を紛れ込ませ、この道士が操る「神法

(enduri fa)」によってジュンガルの君主ツェワンラブタンを亡き者にするという謀略を実行に移そうとしたのである。この時の道士の存在とその動向については、康熙帝の意外な一面としてエピソード的に紹介されたり、清代における術士の活動の一例として取り上げられたりすることはあったが³、清・ジュンガル関係史の中で正面から取り上げられたことはほとんどない。小論では、この時の使節派遣が実現に至る過程を追い、当時の清・ジュンガル関係の一面を明らかにしたい。舞台はバルクル (bar kur、巴里坤) であり、事件の経過を通じて、当時対ジュンガルの最前線として軍営が置かれていたこの地の状況が浮かび上がってくるであろう。なお、本文中の引用史料において [] 内は筆者による補足部分を示す。以下本文中の日付はすべて中国暦による。

1 道士のバルクルへの派遣

康熙58年のジュンガルへの清使節に同行することになる道士が初めて史料上に登場するのは、康熙57年10月のものと考えられる無年月のフニンガ (funinnga、富寧安) の奏摺である⁴。フニンガは鑲藍旗満洲旗人で、ハミ襲撃事件以降対ジュンガルの軍事作戦遂行を命じられ、康熙56年3月には靖逆將軍を拝命し、当時の対ジュンガル軍事作戦の最前線、バルクルの地に駐屯していた⁵。6月2日付けの奏摺では、幼少から目をかけてもらい次々と大臣に任用されたこと、この度將軍に任じられて花翎を恩賜されたことに対する感謝の言葉が綴られている⁶。フニンガは康熙帝の信任厚い重臣であった。

さて、上述の康熙57年10月の奏摺によれば、10月18日、若い道士を伴った侍衛ケシトゥ (kesitu、克什圖) がフニンガのもとを訪れ、行在理藩院発の行文をフニンガに渡した。そこには次のようにあった。

康熙57年8月11日に乾清門の侍衛ラシ (rasi、喇錫／拉錫／拉什) が伝えて勅を下したこと：「フニンガに下せ。この一人の小さな道士は大変弁がたつ。訴えてツェワンラブタンのところに行きたいと数年たった。これを汝のところへ送った。フニンガはよく試してみるがよい。役立つところはあるか。彼に尋ねて、彼がこのようにしたいと言えば彼の言葉の通りに試してみよ。彼について私は良し悪しを知らないので、語ることは出来ない。フニンガが試して役立つところがあれば役立つがよい。ケシトゥはツェワンラブタンのもとに赴いた経験が多い。軍のところにいる人。他の人を送るよりも熟達した人なのでケシトゥに命じて一緒に送った」とのことだった。謹んで従い送った。

康熙57年8月と言えば、チベットを襲ったジュンガル軍に対して清側が軍を派遣しまさに交戦中というタイミングである⁷。道士は名を李慶安と言い⁸、康熙帝に数年間にわたって

計略を訴えたところがあるので、ちょうどハミ襲撃事件を契機に対ジュンガル関係が悪化した頃から康熙帝に対してたびたび献策していたと考えられよう。文面からは、この道士の実力について康熙帝がやや懐疑的であり、現場の将軍であるフニンガに判断を委ねようとしている様が見て取れる。この康熙帝の命を受けてフニンガはこの後李慶安と議論を繰り返すことになるのである。なお、この時李慶安を護送してきたケシトゥは、康熙40年代から50年代にかけて計5回ジュンガルに使節として赴いたことが史料から確認できる⁹。この時点では後に実現する使節派遣の話はまだ全く具体化していない。

フニンガは早速李慶安と会談した。同じ奏摺の後半には次のようである。

10月18日にケシトゥが小さな道士を連れてバルクルに着いた後、小さな道士を奴才私がいる営にゲルを出して整え住ませた。我ら二人だけで[会い]、奴才私は彼に尋ねると、彼の言葉「数百の兵を訓練しようとすれば、必ず別の営がある。今はまた冬の季節。さらに[営を]設けることはできない。私はすべての軍営を見尽くし知った後で、あせらずにまた議論したい」と言う。奴才私は、彼を連れてすべての軍営を見終わった時、彼に問うて、彼がこのようにしたいと言えれば彼の言葉通りに試してみても、役立つところがあれば主に明らかに奏聞し、従い行くほか、奴才私が見るに、小さな道士は年が大変若いとはいえ、もの言いが大変明確で、奴才私の考えに、誠に学んだ術がなければ、彼はどうして聖主に何度も訴えるだろう。また、オイラト等に天変地異をもたらすことができる¹⁰、雨風を呼べばすぐに来る等の類、やはりこのような[能力を持つ]者が兵の場にいると大いに益があると考える。また、小さな道士がバルクルに来た日、軍にいる大臣達が「聖主の派遣した人、会いたい」と言うと、彼は奴才私に尋ねてから、ようやく会った。もろもろすべての送った事情を[私は]明白には知らない。この試す際、あるいは別の営を設けて兵を訓練すべきか等の類の問題があり、軍の場[に關すること]なので、奴才私は、得られるなら主が[道士を]送った事情を衆にわからせ話したい。このために謹んで上奏した。旨を請う。密かに上奏する件なので、奴才私自身が書いた。字がとても乱れているのを主はご寛恕いただきたい。

初めて会った時点でフニンガは李慶安について好印象を持ったようだが、他の大臣達の反応にも見られるように、皇帝がわざわざ派遣したからには特別な人物に違いない、という考えがあったと思われる。フニンガにとってもこの道士の到来は唐突な出来事であったに違なく、現場の兵に説明するために詳しい事情を知りたいとの言葉には、その切実な気持ちが表れていると言えるだろう。

2 バルクルでの道士と將軍フニンガ

フニンガは10月28日から2日間かけて李慶安の求めに応じてバルクルの軍營を見て回り、今後のことについて議論した。11月4日付けの奏摺¹¹によればその様子は次の通りである。李慶安は出発に際して康熙帝から「フニンガと相談し、できることがあれば行え。もしできなければすぐに静かに戻って来い」と言われたと前置きし、モンゴル兵ではなく、満洲兵と緑營兵の壮年の者から800名を選んで部隊を編成し「六丁六甲神法 (lu ding lu giya enduri fa)」で教練を行うことを提案した。その具体的な内容は、

赤い布の上衣を作って着させ、上に鎧兜を着させる。鉄砲を使わず、みな矢袋を腰につけさせる。赤い大旗を用いる。ツェワンラブタンがいるのは西方金の行、赤を用いるのは朱赤の火を用いて金を減ぼすこと。兵800を四方四隅に100ずつとし、長を置いて監督させ、それぞれのところを掌握させ教練する。この教練を来年3月から始めたい。軍が進む時、私は道士の扮装をする。……

というものだった。まさに『三国志演義』における諸葛孔明の兵術の世界である¹²。フニンガはにわかには信じられなかったようで、どのように訓練するのか教えてほしい（回答：教えられない）、行軍の際はどこで指揮をするのか（回答：2、30里離れたところで問題ない）等、矢継ぎ早に質問を浴びせている。李慶安は、出発の際に康熙帝から、軍を率いる際は皇帝から派遣されたとは言わず、フニンガから派遣されたと言うように指示されたとしている。李慶安はまた、自分は出家の身でありこのような行動は本来すべきことではないが、皇帝の恩に報いるために行っていること、功績を求めている訳ではないことを訴えている。フニンガは最終的に次のような判断を康熙帝に伝えた。

奴才私が試したいと言っても、今は全く試して知るべきことはなく、彼に聞いても、何も話さない。ただ、「將軍汝はあるいは後に知ることができるだろう」と言う。彼の言葉・様子を見れば大変信頼でき〔口調は〕よどみない。軍の事は重大なので奴才の問・彼の答えをすべて書いて密かに上奏した。皇帝の判断を仰ぎ、800名の兵士を訓練させたい。

最初の理藩院の行文における康熙帝の言葉にもあったように、この道士は弁舌が巧みだったのであろう。フニンガは道士の実力については大いに疑いを抱いたが、その態度・姿勢は信頼できるとして、軍事教練の実施について実質的には皇帝に判断を委ねている。フニンガとしては皇帝直々の提案を最初から拒否することもできず、やや困惑しているようにも見える。これに対して康熙帝は、「このように答えた言葉はなお少しばかりもっともなようだ」

とやや歯切れの悪い硃批を与えている。

実は同じ11月4日付けでもう2件フニンガの奏摺が存在する。一件¹³は、皇帝から許可を得ているので、自分の師匠に面会に行きたいとの李慶安からの申し出を伝えるものである。これに対しては、康熙帝は、途中で会えば尋ねよといったのであり、自ら会いに行けとは言っていないとして、道士の言動にやや疑いを懐き、フニンガに対し「汝はよく知った人間である。どうかだまされずに改めて相談してさらに上奏せよ」との硃批を与えた。もう一件¹⁴は、これも李慶安からの、皇帝から出発に際して宝剑を賜ったが官位がないので与えてほしいとの要求を伝えるものであった。康熙帝は李慶安が師匠に会いに行きたいと言い出したことを指摘し、事は重大なので再度指示を与えると答えている。

康熙帝の硃批が届く前に、フニンガはさらに李慶安と議論を重ねた。11月15日付の奏摺¹⁵によれば、フニンガは議政大臣会議での来年のトルファン侵攻作戦に関する議論を「すべて」李慶安に話し、自らも明年大いに進軍してジュンガルを滅ぼすことを上奏しようと考えていることを伝えている。李慶安はこれに賛同し、ツェワンラプタンが守りを固めて出てこない場合には、本軍とは別に自分が軍を率いて神法によって「山をずたずたに〔割いて〕横から進み」相手方に深く入り込むという奇襲作戦を提案した。李慶安は文章が書けない自分に代わって皇帝に上奏するようフニンガに頼んでいる。明年の作戦遂行に必要な朱色の粧緞数疋については自分で皇帝に依頼したとも言っている。この奏摺に対する康熙帝の硃批には、必要な品は求めに応じて内府に作らせ、すでに発送したこと、内密に進めるべきことが記されている。神法による秘密裏の軍事作戦の遂行は事実上動き出したと言ってよい。

続く11月22日付のフニンガの奏摺¹⁶では、軍事作戦とは直接関係しない李慶安の行動が報告されている。それによれば、10月23日と11月20日に2度、李慶安は山を祭るため羊を生贄に捧げる儀式を挙行し、この時、「日が昇る方から日が沈む方に向かって山がこだまして響いた」という。1回目の時、兵士たちはみな聞いたというが、フニンガ自身は「その日は風があったので」確信を持たずにその時点では報告せず、今回の2回目では「明確に聞いた」ので報告したのだという。すでにこの時、軍営では李慶安は特別な力を持つ人物として評判になっており、兵士達は「すべての事情を知らないことはない」皇帝が派遣したのだから、「もしも特別な種類〔の術〕をもって身に着けていないのなら、軍の場で益がないのなら、派遣する訳がない」と語り合っていたという。このような空気が辺境の軍営に広まりつつある中で、1回目には聞こえなかった「こだま」が2回目にはフニンガにも聞こえたのであろう。李慶安はまた、軍営内の小山に風水が良いので関帝神、真武神を祀る廟を建てることを進言して兵士たちを喜ばせた。この時もフニンガの意向という形をとっている。11月初めの廟建設の日から寒風が吹き始めて寒くなると、李慶安は7日に祈祷を行った。すると翌日から寒さが緩み、22日には雪も融け、前年同期よりも大変暖かくて不思議だとフニンガは報告している。李慶安はまた、太極や八卦、北斗や南斗が描かれた大旗を作り、護符や硃砂を収める袋を作り、軍営の東南隅に木柵で囲まれた小営を設け、そこにゲルをしつらえて連れて

きた2人の幼童とともに毎晩呪語を唱えたという。

李慶安のバルクル到着以来、一緒に食事をとり毎日数回会うという状況の中で、フニンガが最終的に出した李慶安に対する評価は、「李慶安は本当に誠実に学んだ人。特別な種類の神法があることは本当。軍の場で大いに益があると思う」というものだった。これに対して康熙帝は、「ひたすら密にせよ。事が成った後で初めて言うことができるだけだ。先に言うてうまくいかない時に関係は重大だ。」との殊批を与えている。すでに特異な力を持つ道士の存在自体はバルクルの軍営中に知れ渡っている状況だった訳だが、康熙帝は過熱気味の現地の空気を感じてやや慎重姿勢に転じているように思われる。

12月12日付の奏摺¹⁷の中で、フニンガは改めて正式に満洲・緑營の兵800人による独立した營の設立、軍事教練の開始について許可を求め、必要な物資の調達についても要請した。康熙帝は物資の調達について許可を与え、ここに神法による軍事教練は正式に開始の運びとなった¹⁸。12月12日には別にもう2件奏摺が存在し、ともに李慶安の提案・意見が述べられている。1件¹⁹は、北京にいるジュンガルの捕虜1名をバルクルに連れてきて、神法による軍事教練の様子を見せて、大軍の侵攻を予告する文書を持たせてジュンガルに派遣してはどうかという提案である。その狙いは、恐れた相手が1か所に集まれば神法をより施しやすくなるというものであった。これについてはフニンガも賛同を示し、派遣する捕虜に持たせる文書を中央（理藩院）で作成するよう求める形で皇帝への上奏が行われた。康熙帝はこの作戦案を受け入れすぐに捕虜を派遣することを許可したが、持たせる文書は「〔理藩〕院に命じることはできない。汝がすぐに定めよ」と指示を与えた。道士をめぐる作戦は中央主導ではなく、あくまでも現地の将軍が主導する形にするという康熙帝の方針は一貫している。

もう1件の奏摺²⁰では、李慶安が翌年の進軍時期について意見を述べたことが記されている。当初予定の7月では遅いので、3月20日頃に自らが本軍に先んじて800の軍を率いてトルファンを攻略、さらに進んでジュンガルの本拠地を攻略するというのである。これにはさすがにフニンガも難色を示し、モンゴルは内地とは違い、春の進軍は馬が痩せているので困難なこと、また800の兵のみでは兵力として十分ではないことを指摘した。李慶安は、すべて神法で相手の動きを封じるので問題ないと豪語し、皇帝への上奏を求めた。フニンガは神法を事前に見せてほしいと要求したが、極限状態に至って初めて用いることができるものだと当然のように拒否されている。フニンガが出した結論は、李慶安の案は軽率なので当初の予定通り7月進軍とすべきというものだった。李慶安の神法を認め、軍事教練開始を進言しながら、一方でフニンガはなお神法に対して懐疑的であったことがうかがえよう。これに対する康熙帝の殊批は、「将軍の言は大変良い。今、西の地のことを朕は仔細に議政に勅を下して一同で議して汝に文を送ったのである。汝は改めて仔細に尋ね議して急ぎ上奏せよ」というものだった。ちょうどこの頃チベットのジュンガル軍を撃退するため新たに撫遠大将軍に任じられた皇十四子允禩が北京を出発している²¹。さすがに1人の道士の思いつきで軽々しく軍事作戦の日程が動くことはなかった。

3 ジュンガルからの使節の到来

康熙58年正月、バルクルにジュンガルからの使節が到来した。このことを伝える康熙58年正月の靖逆將軍フニンガの奏摺²²によれば、康熙58年正月10日に、カ倫の官員から、ジュンガルの使節1名及び従者4名合計5人が到着したとの報告がもたらされた。使節の名はアワンダシ（awang dasi）といい、ツェワンラブタンの近くに従う侍衛であり、昨年バルクルから送ったムンケバトウ（mungke batu）、ボロト（bolot）等が勅書を携えて11月10日頃ツェワンラブタンのところに到着、20日に返書を上奏するために派遣されたとのことであった。前年の使節については詳細は不明だが、ツェワンラブタンからの使節を北京には入れずにバルクルから送り返す際に勅書を与えたものと考えられる。ツェワンラブタンの奏文には、チベットの問題をめぐるジェブツンダンバ=ホトクト等による仲介の動きを喜び、黄教を広めたい等の平和的なメッセージもあったが、理藩院は信用できない、ランのような人物²³を派遣していればすべてを伝えていた、といった平和的とは言い難い微妙な言い回しもあった。フニンガは、使節の派遣は見せかけの可能性があるのでカ倫の警備を強化すること、奏文のほかに口頭のメッセージはないとのことなので使節は北京には入れずにバルクルに留めること、使節入京の可否について判断を仰ぎたいことを即座に北京に報告した。

このフニンガの報告を受けて、北京において対応が協議された。正月26日、康熙帝の命により協議を命じられた議政大臣會議は、上述のフニンガの奏摺を引用しながら、次のような結論を出した²⁴。すなわち、使節を北京に入れずに送り返せば、ツェワンラブタンは部院が隠して伝えなかったと言いがかりをつける恐れがあるので、5人のうち涼州から2人を西寧の撫遠大將軍のところへ送るほか、アワンダシ等を入京させ、来た事情を明らかにし、勅書を与えて送り返すとしたのである。2人を西寧に送るというのは議政大臣に検討を命じた際に康熙帝が示した方針であり、撫遠大將軍からツェリンドンドブへ征討理由を明らかにするために派遣する使節に同行させることが想定されていた²⁵。この議政大臣會議の結論に対して、康熙帝は、アワンダシ等を北京へ入れてから送り返したのでは時間がかかるので、使節のうちアワンダシともう1名を入京させ、他の1名は勅書を与えてバルクルからすぐに送り返すことを命じた。この決定に基づき実際に勅書が作成され、モンゴル語の翻訳も併せて実際に送付できる形で完成をみたのは正月29日のことであった。勅書の内容は、チベット侵攻を含むこれまでのジュンガル側の行動を非難するとともに、ラサン=ハーンの妻子と清側捕虜²⁶の返還を要求し、ツェワンラブタンの真意と事情の説明を求めるものであり、使節のうち2名を西寧に送り、アワンダシと1名を入京させ、1名をバルクルから送り返すことも明記されていた²⁷。

さて、フニンガからの報告に基づき北京において上述のような検討がなされていたちよう

どその頃、バルクルではフニンガと李慶安がジュンガル使節への対応をめぐる議論を交わしていた。ところで、言うまでもないことだが、バルクルと北京の間の通信には相当な時間を要する。これまでフニンガの奏摺に対する康熙帝の硃批についてはその都度述べてきたが、それがフニンガのもとに伝わるのは早くとも1か月以上先のことであった。先に述べた11月22日付の奏摺に付された「道士のことは密にせよ。成功してから言え」との硃批がフニンガの手元に届いたのは約2か月先の翌年正月下旬のことであった。正月25日付の奏摺²⁸には、これを受けて改めて秘密裏に事を進める決意が述べられており、合わせて、特異な能力を持っている道士が派遣されてきたことはすでに皆が知っていること、ただし、清軍の侵攻が必ず成功すると上奏するなど彼が軍務に関与していることについては大臣から官員に至るまで誰も知らないことが説明されている。また、フニンガは、信頼の厚い配下のアラナ(arana、阿喇納)²⁹にはすでに概要を伝えていることも正直に述べているが、康熙帝は、アラナは自分も幼少から信頼しており、先祖・親戚も優秀であるとして特に問題視はしていない。

先の12月12日付の奏摺への硃批は正月28日にフニンガのもとに届いた。上述の通り康熙帝はフニンガの判断——3月の進軍ではなく当初の予定通り7月の進軍がよい——を支持した。これを受けた正月28日付のフニンガの奏摺³⁰において、ツェワンラブタンに派遣する使節に李慶安を同行させるという作戦の提案が初めてなされる。この硃批が届く前に、フニンガは李慶安に対して、もし今回到来したツェワンラブタンの使節に返使を送ることになった場合、使節に同行して作戦を遂行することは可能かどうかを尋ねている。李慶安は、自分たちの奏摺（12月12日付奏摺）が戻ってきた後で相談したいと即答を避けた。そして、硃批の到来後、フニンガに再度尋ねられると、自らが主張していた3月の進軍作戦が実現しなくなったことを受けて、使節に同行してツェワンラブタンを滅ぼすことは可能であるとし、道中の絵図を描くために派遣されることとし、皇帝によってではなく將軍（フニンガ）によって派遣される形にすることを提案している。李慶安の想定では、ツェワンラブタンが素直に降伏しない場合は、明らかに殺害するという形はとらず、「私は神法を始めて、内の隠れた彼の心胆を変え、彼の魂を迷わせた時、数日の間に彼は自然に死ぬ」ことになるはずであった。神法とはいえ暗殺行為であることには変わりはない。フニンガは何度も李慶安と議論を重ね、決意の程を確認し、「行けば必ず成功する」との言葉を引き出している。また、兵士たちが疑いを抱かぬよう、絵図を描くためという派遣の目的を衆の面前で宣言したうえで派遣するという細かな手続きについても述べられている。フニンガは、この方法であれば軍を動かさなくてすむので、西方の軍務に支障が出ないこと、「行って成功しなくても全く関係するところはない」との語で奏摺を結んでいる。

この提案に対し、康熙帝は硃批で「李慶安が[バルクルに]行ってよりこの方上奏したことでこれより重要なものはない。そのうえ彼の最初の言葉にも符合する。すぐにこれに従いなせばよい。」と大きな満足を示した。そして、ツェワンラブタンの使節が北京に来るまで

に使節の人選を進める意向を示し、最初に李慶安をバルクルまで護送したケシトゥの名を候補として挙げた。「最初の言葉に符合する」という表現からは、李慶安が軍を率いることなく作戦を遂行する方法を康熙帝に対して以前から伝えていたことがうかがわれる。

同じ正月28日付けでフニングは別に3件の奏摺を北京に送っている。1件³¹は、李慶安が使節に同行することになった場合は彼による軍事教練を中止したいという内容であり、もう1件³²は、先に提案したジュンガルの捕虜1名を送り返すという計略の中止についてであった。そしてさらにもう1件³³は、李慶安からの、ジュンガル使節を入京させてほしいという要請を伝えるものである。使節を北京に入れなければ、ツェワンラブタンはそのことに不満を懐き、作戦遂行に支障が出ることを彼は恐れたのである。フニングは、ジュンガル使節をバルクルから送り返すようにとの指示が北京から先に届いた場合にはしばらく実行に移さず、新たな指示を待ちたいとした。以上3件の奏摺はいずれも李慶安が使節に同行してジュンガルに赴くという作戦の実施に絡む要請であったが、すべて康熙帝の裁可を受けている。この時点で神法による軍事教練は実施されないまま中止となったのである。

すでに述べたように、北京では正月26日にはすでにツェワンラブタンの使節のうち1名をバルクルから勅書を与えて送り返すことが決定しており、29日に完成した勅書はバルクルに送付された。アワンダシ自体の入京は認められたので、使節の入京が許可されないかもしれないというフニングの想定とは事態の推移は若干異なるが、結局北京から届いた勅書はバルクルにそのまま留め置かれ、フニングは北京から新たな命令が届くのを待った³⁴。

4 清使節の派遣と謀略の結末

李慶安を同伴させて使節をジュンガルに派遣することを提案した正月28日の奏摺に対する康熙帝の硃批がバルクルに届いたのは2月29日のことだった。このことを記した2月30日付のフニングの奏摺³⁵では、必要な物品はフニングが準備し、李慶安と同行する人物の到着を待ち、秘密裏に進めることが述べられている。

新たな清使節の派遣が決定したことで、使節が持参する新たな勅書の作成が必要となった。清側使節を派遣することを述べた勅書は、康熙58年3月に内閣において正月作成の勅書を微修正する形で作成された。勅書に付された内閣の原注にはこの時の事情が記されている。それによれば、3月22日に理藩院から内閣に届いた文書には次のようであった。

議政して上奏したこと。「ツェワンラブタンに下す勅書を作り書き、呈覧し、内閣に交付して満洲・モンゴルの書をあわせ書き、玉璽を押して、員外郎グル（guru、古魯）が持ちフニングのところに至った後、フニングのところから派遣すべき人を〔選んで〕使臣とし、勅書を渡してアワンダシ等とともに送るのがよい」と康熙58年3月22日に乾清

門頭等侍衛ラシに渡し、転じて上奏した時、「議によれ」との旨を得た³⁶。

ここで注目すべきは、清側が派遣する使節の人選がバルクルのフニンガに一任されたということである。

バルクルにおける派遣使節の人選については、5月14日付けのフニンガの奏摺³⁷の中で詳細に述べられている。それによれば、グルがジュンガル使節アワンダシを同伴してバルクルに到着したのは5月6日のことであるが、それより以前に理藩院から、派遣する使節の人選はフニンガに一任するとの行文が届いており、その指示に基づいて、フニンガは李慶安との間で議論を進めた。当初は、先の康熙帝の硃批にも名前が出ていたケシトゥをフニンガは候補に挙げた。ところが、李慶安は、ケシトゥは2度使節として派遣されたが全く成果を上げておらず、2度目の派遣ではツェワンラブタンから受入れを拒否されたという事実を上げ、難色を示した³⁸。フニンガが「では誰がよいか。新満洲³⁹、モンゴルの侍衛から選びたい」と問うと、李慶安は、新満洲の侍衛はモンゴル語ができず、モンゴルの侍衛は漢語が出来ないという理由でこれも拒否した。次にフニンガが侍読学士インジャナ (injana、殷札納)、員外郎グルの名をあげると、李慶安はインジャナを可とし、グルは不可との判断を示している。さらに追加してフニンガのあげた名前の中から、筆帖式チナルトゥ (cinartu、齊納爾圖)、ケチェオ (keceo、克籌) の派遣について合意した。李慶安の人選についての根拠は「私の見るところ」というものであり、また、しばしば「仙書」を見て判断を下している。康熙帝に対するフニンガの説明は以下のものであった。

私が思うに、ツェワンラブタンに下した勅書は[言葉を] 尽くしており、全く議論することもない。彼が見て、大変よい、行くべきだと言った人を任じない訳にはいかない。そして、インジャナは各地に赴いた経験が多く、古くから[仕えて] いる人であり、モンゴルのことも知っている。チナルトゥは人物がよい。彼らを送ればまたよいと思う。

交渉能力と言うよりも、李慶安が気に入るかどうかが人選の基準になっていることがわかる。ただし、フニンガが補足しているように、インジャナは鑲紅旗満洲旗人で、かつて呉三桂やジュンガルのガルダン征討の軍務に従軍し、一般的にはトゥリシェン (図理琛) 使節団の名前で知られるロシア経由でのトルグートへの使節に長として派遣されるなど、豊富な経験を有し、康熙56年にフニンガが靖逆將軍に任じられて以来その配下にあった人物である⁴⁰。使節の人選としては間違っていないと言えるだろう。

アワンダシ等が到着した後、フニンガはわざわざ軍營の大臣達を集めてインジャナをはじめとする使節団のメンバーを発表し、これも打ち合わせ通りに、道中の絵図を描くために李慶安を使節団に筆帖式として加えるという自分の考えを表明し、李慶安に「將軍が私を使臣と一緒に土地を図にするために送るなら、私は喜んで一緒に行きたい」との言葉を語らせて

いる。その後のフニンガと李慶安の会話の中で、李慶安は自らの今回の任務における決意の程を語り、それを自分に代わって皇帝に上奏してほしいと要請し、フニンガは狡猾なツェワンラブタンに騙されることなく迷わず任務を遂行するよう忠告している。そして、使節団における李慶安の位置・立場について確認を行い、李慶安の名前を隠して「アンマリ (an mali)」という偽名を用いることも打ち合わせた。

その後、フニンガは、今回の謀略をインジャナ等に知られないよう、インジャナ・チナルトゥ等を連れて李慶安のもとに赴き、次のような指示を与えた。

李慶安を、私が任じて土地の様子、道の遠近を絵に描き、筆帖式として汝等とともに送る。およそ座り立つ時、インジャナ汝は侍読なので首席に座れ。続いて筆帖式チナルトゥが座れ。チナルトゥに続き李慶安が座るがよい。およそ尋ねられれば、土地を描かせに送ったものとは決して言うな。我らと一緒に送った筆帖式だと言え。名前を聞かれれば、アンマリと言え。アワンダシ等と一緒に行くので、道中我が指示に従い章京、筆帖式と同様に行け。李慶安がたとえ土地を描くために行く人で、使臣のことは彼に関係ないとしても、汝等とともに行く人なので、ツェワンラブタンが言ったどんな言葉であろうとすべてのことを決して隠すな。全部李慶安に話して記せば汝等にも益がある。また、図らずも彼らの卡倫に至った後、ツェワンラブタンが「ただインジャナ汝だけを連れて行きたい。他をすべて残す」と言えば、汝は決して従うな。[ツェワンラブタンに対して]「汝が使臣を派遣してほしいと我等の聖主に求めたので、我等を任じて送った。その上、汝等の送ったすべての使臣はみな[北京に]入れた。汝等がもし我等の従僕を多いと言うなら、我等は斟酌して残し、少人数を連れて行きたい。もし、我等の使臣として来たものたちをともに入れさせずに、ただ私だけを1人連れて行くというなら、私は行くことはない」と言って、必ず全員で行けばよい。

インジャナをはじめとする使節団の人員にも謀略を秘密にするために、道中の様子を絵に描くという任務そのものを極秘扱いの特別な任務と位置付けていることになる。康熙帝が直々にバルクルに送り込んだ特異な能力を持つと信じられていた道士を使節団のメンバーに加え、その上ツェワンラブタンの言葉を一言残らず伝えよ、何としてでも李慶安をツェワンラブタンに会わせよ——全員で会えというのは明らかに李慶安を外すなという意味である——といった命令を出すというのは尋常とは言いがたく、インジャナ等が訝しんだとしても全く不思議はない。しかしながら、フニンガの奏摺による限り、インジャナは將軍の指示をしっかりと守りたいと言答えただけであった。

フニンガの奏摺には、この後、使節に同伴する兵⁴¹、使節に必要な家畜・物資の準備について記され、最後にフニンガ自ら卡倫の近くまで見送り、李慶安及びインジャナと重ねて言葉を交わし、指示を与えて送り出したことが記されている。後に述べるように出発は5月13

日のことであった。この奏摺を受け取った康熙帝は硃批で「事は大いに順調のようだ。処理して送ったことは大変よい」と満足を示し、吉報があればすぐに知らせるよう指示している。

李慶安が同行したインジャナ使節がバルクルを出発してから1カ月あまり経過した6月24日付のフニングの奏摺が2件存在する。1件⁴²でフニングは、李慶安の計略が成功した場合はジュンガルは内紛に陥り、来年に予定する清軍の侵攻がおそらく成功すること、場合によっては侵攻を今冬に早めるかもしれないことを述べている。もう1件⁴³では、李慶安が帰着後北京に行く際、皇帝の許可を待たずに北京へ行かせて良いかを尋ねている（指示を待てとの硃批）。李慶安の任務の成功を信じ、帰着を心待ちにしているフニングの様子がかうかがわれよう。

さて、その後李慶安はジュンガルから無事戻ったのであろうか。清・ジュンガル関係のその後の推移からすれば、彼の計略が成功したはずはない。実は李慶安の動きが史料の上から追えるのは、上で述べた6月24日付けのフニングの奏摺までである。その後の消息は全く知れない。ただし、この時李慶安が同行したインジャナ使節については断片的ではあるが史料が残されており、ジュンガルの地での様子がわかる。

それは、9月8日付の靖逆將軍フニングの奏摺である⁴⁴。この奏摺は、インジャナとともにジュンガルに派遣された閑散キチェオ⁴⁵が使節団本体に先んじて9月4日にバルクルに帰着し、現地での様子を報告したことを伝えるものである。キチェオの報告によれば、現地での使節の様子は以下のものであった。使節団は5月13日にバルクルを出発、6月27日にテキス河畔のツェワンラブタンのもとに到着し、8月6日の出発まで1カ月余りの滞在中、合計6回ツェワンラブタンに会って宴会を行った。モンゴル語ができないキチェオがインジャナから聞いたところでは、ツェワンラブタンは、「ただ大いなる主の衆生を安樂にし、教えを広め、商売をさせてほしい」と語った。それ以外の言葉はすべてインジャナが記録した。勅書への返事を問うと、ツェワンラブタンは「勅書に答える奏文を書いてアワンダシを派遣して大いなる主に上奏する。そこに我がすべての言葉をみな書いた」と答えた。ツェワンラブタンは使節の到着後すぐに迎えをよこし、清使節をとどめ遅らせることはなかったという。

この報告からは、使節団の人員は1カ月の滞在中にツェワンラブタンに何度も面会し歓待を受けたことがわかる。使節団の席順が第3位の李慶安も当然ツェワンラブタンに会えたはずである。ツェワンラブタンに面会できないかもしれないというフニングの心配は杞憂に終わった。しかしながら、滞在中に何か事件・異常事態が生じた節はない。李慶安の神法は不発に終わったと言うしかないだろう。フニングは奏摺の中で、李慶安については全く触れておらず、また、インジャナが到着した後、より詳しい報告を行うことを述べているが、残念ながらそれに該当する奏摺は今のところ見出すことができない。

アワンダシを伴ったインジャナ使節は同年の10月に北京に到着した。この時ツェワンラブタンがもたらした奏文そのものは史料として確認できないが、アワンダシに与えてツェワンラブタンに送付した返書となる勅書が『蒙古堂檔』にある⁴⁶。そこでは、黄教を広めたい

と言いながら実際はチベット、パンチェンラマを苦しめているツェワンラブタンの姿勢を強く非難し、「朕は絶対に承知しない。永遠に仇になったと考える」と言い切っている。李慶安の神法の力によりツェワンラブタンが減んだという知らせを心待ちにしていたはずの皇帝は、いったいどのような心境でジュンガル使節を受け入れ、この勅書を書いたのであろうか。

おわりに

周知のように、翌康熙59年、清側はチベットへ進軍してジュンガル軍を駆逐し、また、バルクル、アルタイの清軍もジュンガルに攻勢を仕掛けトルファンを占領するに至る。康熙58年のジュンガルへの使節派遣は、本格的な軍事侵攻の前にあわよくば労力をかけずにジュンガルを滅ぼそうとする軍事作戦の一環として位置づけることが可能であろう。ただし、本稿で詳細に述べたように、その作戦及び実施に至る過程は極めて特異なものであった。

巧みな弁舌によって取り入ってきた若い道士を、当初康熙帝はやや疑いを持ちながらも最前線の軍営に送り込み、役に立ちそうかどうか將軍フニンガに見極めさせようとした。現地では、康熙帝によって送り込まれたというまさにそのことと、道士が示したと信じられた不思議な力によってその存在は一躍評判となった。辺境の厳しい環境に置かれた將軍・兵士達にとって、皇帝が直々に送り込んだ特異な能力を持つ道士の存在は心強く感じられたことであろう。毎日のように接触を重ねた將軍フニンガも、道士の誠実な姿勢もあってその実力を信じるようになっていった。

作戦としては、当初は道士による八旗・緑營兵の軍事教練実施が真剣に検討され、康熙帝も実施について裁可を与えたが、たまたまジュンガルからの使節が到来したことにより、返使を派遣し、そこに道士が単身加わる形での作戦実行が決定されるに至る。作戦変更の背景には、実際に兵を動かして失敗した場合の影響の大きさを懸念したフニンガの現実的な判断があったと言えよう。逐一フニンガからの報告を受けていた康熙帝も使節派遣を利用した作戦遂行に賛成し、期待をかけるようになってゆく。

作戦実施に至るまでの過程で一貫しているのは、作戦を主導しているのは現地の將軍フニンガで、すべてフニンガの一存で行ったことであり、皇帝は一切関知していないという形で進められたことである。李慶安の言動から、このことはバルクルに派遣される前に北京において康熙帝との間で繰り返し確認がなされていたものと思われる。途中で事が発覚・失敗に終わった時の影響を考えればこれは当然の措置とも言えよう。一方、全責任を負う立場のフニンガとは言えば、李慶安との2人だけの協議を通じて、使節の人選も含めてほとんどすべて道士の言をそのまま採用した。そして、使節団の長であるインジャンナにさえ作戦のことは

秘密にされたのである。この時の使節派遣は、まさに道士によるツェワンラブタン暗殺作戦遂行のためのものに他ならず、やはり通常の使節派遣とは区別されねばならない。

「天下を統べ治める大いなる主」——インジャナ使節が持参した勅書冒頭にある言葉である——を自任する皇帝が画策したジュンガル君主暗殺という謀略は、単に実を結ばなかっただけではなく、結果として全く露見もしなかった。極秘裏に進められた作戦は極秘裏に幕を閉じたのである。康熙帝にとっては、この試みが露見せずに終わったのは不幸中の幸いではなかったか。もし、事がジュンガル側の知るところとなっていれば、おそらくは手はず通りに將軍フニングが責任を負ったのであろうが、後世への影響は小さくはなかったはずである。なぜならば、この後ひとしきりの軍事衝突をへて、両者は相互の使節派遣を通じて講和交渉を開始することになるからである⁴⁷。講和を呼びかける使節団に暗殺者が紛れ込んでいたという事実が残ればそれは清側にとって大きな汚点となったであろう。康熙58年のこの事件は公的な史書に記載されるはずもなく、歴史の闇に葬られた。しかしながら、この事件は、清・ジュンガル両者の関係が極限まで緊張した状況において生じた特異な出来事として記憶に留め置かれるべきではないだろうか。

史料

- 『方略』：『欽定平定準噶爾方略』 満文本、東洋文庫所蔵
 『国朝著献類徴』：『国朝著献類徴』 江蘇広陵古籍刻印社、1990
 『康熙全訳』：『康熙朝満文硃批奏摺全訳』 中国社会科学出版社、1996
 『康熙硃摺』：中国第一歴史檔案館所蔵、宮中全宗『康熙朝満文硃批奏摺』
 『蒙古堂檔』：『清内閣蒙古堂檔』 内蒙古人民出版社、2005
 『清史列伝』：『清史列伝』 中華書局、1987
 『聖祖実録』：『大清聖祖仁皇帝実録』 台湾華文書局、1964
 『雍正全訳』：『雍正朝満文硃批奏摺全訳』 黄山書社、1998
 『雍正硃摺』：中国第一歴史檔案館所蔵、宮中全宗『雍正朝満文硃批奏摺』

参考文献

- Kraft, Eva S. (1953) Zum Dsungarenkrieg im 18. Jahrhundert : Berichte des Generals Funingga (Das Mongolische Weltreich 4), Leipzig.
 Petech, L. (1972) China and Tibet in the early XVIIIth century, 2nd. Revised edition, Leiden.
 包青松 (2011) 「策妄阿喇布坦統治時期的準噶爾汗国研究 (1689-1727) ——以『清内閣蒙古堂檔』為主線」(内蒙古大学博士学位論文)
 胡宝亮 (2016) 「道士制敵：康熙的秘密軍事行動」『文史博覽』1：54-55

準噶爾史略編写組 (1985) 『準噶爾史略』北京、人民出版社

荘吉発 (2010) 「師巫邪術——清代術士の活動」『清史論集(二十)』(文史哲出版社): 291-312

石濱裕美子 (2001) 『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店

緒形康 (2013) 「大清帝国の言語政策」神戸大学文学部『紀要』40: 45-68

澁谷浩一 (1996) 「康熙年間の清のトルグート遣使——所謂密命説の再検討を中心に——」茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』29: 71-93

—— (1997) 「康熙五十四 (1715) 年のジュンガルのハミ襲撃事件と清朝」茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』30: 59-81

—— (2007) 「ウンコフスキー使節団と1720年代前半におけるジュン=ガル、ロシア、清の相互関係」茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』2: 107-128

—— (2008) 「1723-26年の清とジュン=ガルの講和交渉について—18世紀前半における中央ユーラシアの国際関係—」『満族史研究』7: 19-50

—— (2011) 「1734-40年の清とジュン=ガルの講和交渉について——キャフタ条約締結後の中央ユーラシアの国際関係——」『東洋史研究』70-3: 608-572

渡邊義浩 (2008) 「三国志の世界」二松学舎大学『人文論叢』80: 1-14

注

- 1 当該時期のチベット、清、ジュンガルの関係については、Petech(1972: 32-73)、準噶爾史略編写組 (1985: 162-172)、石濱 (2001: 281-319) を参照。
- 2 康熙54年及び55年の使節派遣については、澁谷 (1997: 68-75) を参照。康熙58年の使節派遣については澁谷 (2007: 112-113) で言及したが、その詳細については論じられなかった。
- 3 荘 (2010): 291-294。緒形 (2013: 63-64) は荘 (2010) を引きながら、大清帝国が有する「秘教的イデオロギー」の一事例としてこの事件に言及する。また、胡 (2016) は学術論文ではないが、『康熙硃摺』の記事を紹介しながら康熙帝の意外な一面を指摘する。
- 4 『康熙硃摺』案巻号513、民族事務・蒙族、マイクロフィルム6巻1671-1678コマ。この奏摺の漢訳は『康熙全訳』には収録されていない。道士についての言及がある『康熙硃摺』所収のフニングによる一連の奏摺は「奴才 (aha) フニングが密かに謹んで上奏すること」という文言から始まる密奏で、官職名も記されていない私信である。なお、以下で『康熙硃摺』案巻号513、民族事務・蒙族の史料を引く場合はマイクロフィルムの巻・コマ数のみを記すこととする。
- 5 フニングの伝記は『清史列伝』巻十二にある。
- 6 『康熙硃奏』案巻号510、軍務・人事、6巻1612-1614コマ (漢訳: 『康熙全訳』1200頁)。
- 7 湖広総督エレンテイ (erentei、額倫特)、侍衛セレン (sereng、色楞) 等の清軍は7月からカラウス (kara usu) でジュンガル軍と交戦し、閏8月初旬に壊滅している。北京に報告がもたらされたのは9月末のことであった。『方略』前編巻5、康熙57年9月甲辰の条。
- 8 満文史料では「li cing an」と表記される。管見の限りこの人物に関する漢文表記は不明だが、本稿では『康熙全訳』の表記に従う。
- 9 『蒙古堂檔』11冊: 500-503頁、康熙41年9月20日付け勅書; 同冊: 504-519頁、康熙42年10月14日付け勅書; 同冊: 549-555頁、康熙54年6月初9日付け敕書; 同書19冊: 339-365頁、康熙55年閏3月初9日付け敕書; 同冊、443-464頁、康熙55年11月23日付け勅書。
- 10 原文は、「ület sei jada baitalame bahanambi」。「jada」を悪天候、急な気候の変化、天変地異を表すモンゴル語由来の単語と解釈した。
- 11 『康熙硃摺』6巻 1679-1696コマ (漢訳: 『康熙全訳』1338-1339頁)。

- 12 『三国志演義』の中で諸葛孔明が使う道術については、渡邊（2008：11-14）を参照。
- 13 『康熙硃摺』6巻1697-1701 コマ（漢訳：『康熙全訳』1339頁）。
- 14 『康熙硃摺』6巻1702-1704 コマ（漢訳：『康熙全訳』1339-1340頁）。
- 15 『康熙硃摺』6巻1705-1714 コマ（漢訳：『康熙全訳』1340頁）。
- 16 『康熙硃摺』6巻1715-1727 コマ（漢訳：『康熙全訳』1342頁）。
- 17 『康熙硃摺』6巻1728-1730 コマ（漢訳：『康熙全訳』1344頁）。
- 18 ただし、後に述べるように、正式な皇帝からの裁可が届く頃には作戦は事実上変更となり、実際の軍事教練は実現しなかった。
- 19 『康熙硃摺』6巻1731-1736 コマ（漢訳：『康熙全訳』1344頁）。
- 20 『康熙硃摺』6巻1737-1754 コマ（漢訳：『康熙全訳』1344-1345頁）。
- 21 撫遠大將軍に任じられた皇十四子允禵が北京を出発したのは康熙57年12月12日のことであった。奇しくもフニングの奏摺の日付と同じ日である。『方略』前編卷5、康熙57年12月乙卯の条；『聖祖実録』巻282、同日条。
- 22 Kraft1952：133-134。日にちは不明。同書所収のフニングの奏摺（満洲語写本のローマ字転写）はほとんどが「靖逆將軍フニング」名義であり、『康熙硃摺』所収のものとは性格を異にする。
- 23 第1章冒頭で引用した理藩院の行文に乾清門侍衛として名前が見えるラシは正白旗蒙古旗人で、かつてツェワンラブタンのもとに使節として派遣された経験を持ち、康熙朝後半から雍正朝初期にかけて対ジュンガル関係に深くかかわった人物である。澁谷（2007：116-120）を参照。
- 24 康熙58年正月26日付議政大臣領侍衛内大臣バフンデイ（bahūndei 巴璉德）等の奏摺、『康熙硃摺』機構包、編号11、理藩院、7巻2444-2460 コマ（漢訳：『康熙全訳』1364-1365頁）。
- 25 撫遠大將軍からツェリンドンドブへの使節派遣については、康熙58年正月26日付議政大臣領侍衛内大臣ハイギン（haigin 海金）等の奏摺（『康熙硃摺』機構包、編号11、理藩院、7巻2427-2443 コマ、漢訳：『康熙全訳』1363-1364頁）を参照。
- 26 康熙57年にエレンテイとともにジュンガル軍に敗れた侍衛セレンは後に「陣亡」とされたが（『聖祖実録』巻295、康熙60年11月壬辰の条）、この時点ではジュンガルの捕虜になったという認識がなされており、清側は返還を求めている。
- 27 『蒙古堂檔』20冊、108-113頁に満洲語の勅書、113-118頁にそのモンゴル語訳、119-121頁に文書処理の過程を記した原注がある。後に述べるようにこの勅書は実際には使われなかった。
- 28 『康熙硃摺』6巻1760-1767 コマ（漢訳：『康熙全訳』1361-1362頁）。
- 29 アラナは正黃旗蒙古旗人で、当時参贊大臣としてフニングの配下にいた。アラナについては『国朝耨類微』巻277参照。
- 30 『康熙硃摺』6巻1768-1782 コマ（漢訳：『康熙全訳』1365-1366頁）。
- 31 『康熙硃摺』6巻1783-1785 コマ（漢訳：『康熙全訳』1366頁）。
- 32 『康熙硃摺』6巻1791-1794 コマ（漢訳：『康熙全訳』1367頁）。
- 33 『康熙硃摺』6巻1786-1790 コマ（漢訳：『康熙全訳』1366-1367頁）。
- 34 勅書に付された内閣の原注（註27を参照）によれば、送られた勅書はバルクルのフニングのところに保管され、その後インジャナ（後述するジュンガルへ派遣された使節）がジュンガルから戻った際に北京に持ち帰り内閣に保管された。
- 35 『康熙硃摺』6巻1800-1806 コマ（漢訳：『康熙全訳』1372頁）。
- 36 『蒙古堂檔』20冊、134-135頁。
- 37 『康熙硃摺』6巻1807-1839 コマ（漢訳：『康熙全訳』1394-1395頁）。
- 38 康熙50年代の使節派遣のことを指していると思われる。ケシトゥがツェワンラブタンに受入れられずに追返されたことについては、後の康熙59年10月に北京に来たジュンガル使節に渡された勅書の中で、過去のジュンガルとの関係を振り返る文脈において言及されている（『蒙古堂檔』20冊、147-171頁）。
- 39 ツェワンラブタンのハミ襲撃後、フニングが軍務を命じられた際、10名の新満洲（ice manju）の

- 侍衛が派遣されている。『方略』前編卷1、康熙54年4月乙卯の条。『聖祖実録』卷263、同日条。
- 40 雍正元年6月10日付靖逆將軍フニンガの奏摺（『雍正硃摺』案卷号860、内政類・職官項）に、引退を申し出たインジャナの経歴が記されている。なお、かつて澁谷（1996）でトルグートへの使節派遣について論じた際、この史料の記述を使節団の団長がインジャナであったことの根拠の一つとしてあげた。ところが、その後出版された『雍正全訳』（171頁）では、トルグート遣使の部分を「派我為陪使」と誤って漢訳している。原文は「dalabume takūraha」であり、「長として派遣した」と訳さねばならない。重大な誤訳なのであえてここで指摘しておく。
 - 41 これも李慶安の希望に従い緑營兵を14名選び、李慶安の従者3名と合わせて17名を同伴させている。
 - 42 『康熙硃摺』6卷1840-1843 コマ（漢訳：『康熙全訳』1406頁）。
 - 43 『康熙硃摺』6卷1844-1846 コマ（漢訳：『康熙全訳』1406頁）。
 - 44 Kraft1952：134-135. この史料については、ツェワンラプタン統治期のジュンガル史を扱った包（2011：69）が言及するが、清使節の名前を誤って「伊興噶」とし、別の箇所でごく簡単に触れられる李慶安の存在（包2011：116）とは全く関連付けられていない。
 - 45 ローマ字転写は「kiceo」であり、ここではこの表記に従うが、前出のケチェオ(keceo)と同一人物ではないかと思われる。
 - 46 康熙58年10月27日に完成した勅書。『蒙古堂檔』20冊、137-140頁に満洲語、141-145頁にそのモンゴル語訳、145-146頁に文書処理過程を記した内閣原注がある。
 - 47 雍正・乾隆年間における両者の講和交渉については、澁谷（2007；2011）を参照。